

佐藤 ちさと

SATO Chisato

工芸の視座 作品「ヤイエューカラ」及び研究報告書
The perspectives through KOUGEI Work "yaieyukar" with research paper

デザイン学領域群 クラフト領域



ヤイエューカラ

2009

ceramic, glass

h2500 × w3800 × d3500

序

「工芸」に内在する真理とは何か。言葉の理解からは難解させ誤解のある工芸の姿を、つくり手の視点から考察し明らかにすることが、本論の主旨である。工芸の真理をあらゆるものに精通しうる視座として社会へと繋いでいくことで、工芸と「人」、「生」を重ね、世界の捉え方、生きることに對する一つの見解を提示した。

第一章

MONOTSUKURI (工芸)のシステム

工芸における素材が人にとってどのように位置し、関係性を持ち、作用するのか。人が一人ひとり固有の身体(=生理)をもつように工芸における素材もまた固有の生理を持ち、またそれに依拠する造形のシステムを持っている。つくり手の生理が他者としての素材の生理と連動し相互作用(交感)することを通して固有を導き出すことを、生物学におけるオートポイエーシス理論を絡めながら考察した。

第二章

観ること

現代の都市空間に生きる人間は、実体験がなくとも、視覚から送られてくる脳のイメージ(=自らの身体を伴わない他者の、仮想の)によって事象を捉えることが習慣化されている。このことで物事の真理を掴むことは困難である。

工芸における「観る」という行為は、素材の変化の過程を、つくり手の生理を通して直観で捉えることを前提とする。よって、現前の事象をありのまま捉えることが可能となり、「観る」ことは即固有の視点となる。

これを「イメージ」、「まなごしのジレンマ」を廻る絵画と工芸の比較考察を通して、工芸の特質の一つとして提示した。

第三章

MONOTSUKURI (工芸)における場所

工芸において、素材はつくり手にとって生理の交感と、それによってかたちが現れる過程を考察するための「場所」として機能していると考えられる。これを、西田幾多郎が提唱した「場所」の概念と対照し、工芸のひとつの機能として考察した。素材はつくり手を「日常」における一般概念から切り離し行為の中にありのままの姿を捉えさせる。

素材(=自然)は、一般社会における「人間」を普遍的な「個」へと還元し、さらに固有の生へと導くための「場所」として機能していることを、ここでは述べた。

実例として一作家たちのまなごし

第一章から第三章を受けて、実際に自然(素材)によりものづくりを行う作家—安藤栄作、齋藤敏寿、山野千里—を取り挙げ、彼らの制作に対する姿勢を考察した。

安藤は作品にONENESS(ありとあらゆる個のつながり)を求め、自身の在り方そのものを表す。齋藤はarchetypeシリーズを通し、あらゆるものを貫通しうる元型として作品を体現している。山野は素材を通して見えることを現実のものに見立てながら面白おかしく物語る。

自我から一歩退いて素材という「場所」に立つ。その場所にたった本人だからこそ見出せた真理を外へ繋ぐという工程で、つくり手の生理が固有として働く。工芸の真理を本章で具体的に導き出した。

終章

工芸の視座にたったものづくりは、人工化の進む日常において、見せ掛けの普遍性に固有が埋没しつつある中で、改めて個としての「人間」の存在意義、固有の生をもつ「人」の在り方に気づかせてくれるものである。

現代の日本は良くも悪くも欧米の影響を色濃く受けている。日本の素姿とは果たしてどのようなものであったか。それはこの風土に生きる人によってしか見出すことが出来ないはずである。

今一度、日本の風土に根付いたものの捉え方、関係の仕方を見つめなおしていく必要がある。ものごとのありのままの姿、即ち真理はその内側から滲むように染み出てくるものである。それを、それぞれの個が固有の視点で捉え、自らの手で伝えていくことに、生の貴さ、在り方、意義を見出すことが可能なのだということが、工芸を通し明らかになった。

研究報告書

工芸の視座から自身の制作を見つめなおし、修了制作に至るまでの背景、素材と自己の関係性、捉え方、テーマについて述べた。

おわりに

人がものをつくるという行為は先史から脈々と続いてきた。素材は変わり、人が変わっても、一貫して変わらない真理があるのだということを、工芸の視座にたつことで実感できる。ここで得た気付きを持って、自身の在り方、社会のあり方をこれからも絶えず問い続けて行きたい。

